

魯迅と 1920 ～ 30 年代中国における ドストエフスキー文学の伝播

——同時代の日本・ロシアとの関係を中心に——

白 井 澄 世

問題の所在

中国近現代文学の創出期において、ドストエフスキーが紹介されたのは比較的遅く、また、その紹介もそれほど注目を集めなかった。例えばドストエフスキーの翻訳作品が中国で初めて刊行されたのは 1926 年であり、初めての選集が刊行されたのは 1946 年である（～ 1953 年。文光書店刊）。同じアジアでも日本では 1892 年、内田魯庵訳『罪と罰』が出版され、1917 年には全 16 巻の全集が刊行されて以降、現在まで 11 種類の全集が刊行されるほどドストエフスキーは熱狂的に読まれ続けている。このような状況と比較すると、近代中国とりわけ民国期においてドストエフスキーは広範な読者を獲得せず、中国人読者に親しまれなかったように思われる¹⁾。このドストエフスキーに対する中国人読者の「疎遠」な心理を表す言葉として度々引用されるのが魯迅の次の言葉である²⁾。

彼（注：ドストエフスキー）は餘りに偉大で、しかも自分は其の作品をさう勉強して読んだことがなかった。回憶して見ると若かつたときに偉大な文学者の作品を読んで其の作者を敬服すれども、どうしても愛しないものは二人有つた。一人はダンテで〔略〕もう一人即ちドストエフスキイだった。〔略〕ドストエフスキイ自分は罪人と共に苦しみ、拷問官と共に面白がつて喜んで居るらしい。それは決して只の人間の出来る仕業でなく、語り偉大であつたからである。併し自分は度々読んで行く事をよさうかと思つた。〔略〕只支那の読者としての自分は未だドス

(2)

トエフスキイ的忍従、即ち横逆に対する徹底的な、本当の忍従を腑に落ちない。支那には露西亜のキリストが居ない。支那には神の代りに聖人の礼義が君臨して居る、殊に弱々しい女性の上に³⁾。

だが、魯迅は中国にドストエフスキーが必要ないと考えた訳ではなく、実際、彼自身がドストエフスキーに無関心だったのでもなかった。魯迅は多くの文章の中でドストエフスキーに言及し、翻訳書の刊行を強く望んでいた。現に中国初の翻訳書は魯迅の後押しによって生まれたものであった。つまりこの発言の背後には魯迅のドストエフスキーに対する強い関心があったと思われる。

ところで魯迅がこの言葉を発した 1930 年代の中国ではドストエフスキーに対して「疎遠」とは異なる状況が展開しつつあった。例えばドストエフスキー逝去 50 周年である 1931 年には『罪と罰』のほか『虐げられた人々』『地下室の手記』などの翻訳書が刊行されたほか、日本やソ連のドストエフスキー論が多数翻訳・紹介された。つまり 1930 年代は、翻訳書の刊行に加え様々な評論が紹介され、中国において新しいドストエフスキー・イメージが形成される土壌ができつつあったのである。魯迅の文章はそのドストエフスキー紹介の活況の中で発表されたものであった。

この時期のドストエフスキーの受容を論じた先行研究で最もまとまった論を展開しているのは李今「陀思妥以夫斯基在三四十年代的中国」（『魯迅研究月刊』2004 年第 4 期）である。李今の論によると、1930～40 年代には 20 年代とは異なる新たな受容のステージが形成され、ドストエフスキーの偉大さが肯定されたが、それにも関わらず中国知識人には「心からの共鳴と隠しきれない賞賛が欠落していた」。そして李今は、魯迅の文章はこのような中国のドストエフスキーに対する非親和性を現すものとしている。

だが先述したように中国におけるドストエフスキー受容の本格的な発端（翻訳書の刊行）は魯迅の手によって開かれたのである。その十年後における魯迅のドストエフスキーに対する言葉は果たしてドストエフスキーと中国

との非親和性を指摘したものだったのだろうか。魯迅はどのような状況においてドストエフスキーに言及し、その発言はどのように受け取られたのだろうか。

しかしドストエフスキーに対する魯迅の言及は少なくかつ慎重であり、魯迅の真意を探るのは容易ではない。そこで本稿では 1920～30 年代中国におけるドストエフスキー翻訳・紹介状況を整理し、その中に魯迅を位置づけ、その言葉が発せられた背景を明らかにしたい。その際、李今氏ら中国研究者が指摘しつつも分析するに到っていない、1930 年代中国に流入した日本のドストエフスキー論についての詳細を明らかにし、資料的な補充とすると同時に、日中のドストエフスキー受容に対する初歩的な考察を試みたい。

1、五四期におけるドストエフスキー

『魯迅目睹書目』⁴⁾によると、魯迅は 1913 年 8 月 8 日、内田魯庵訳『罪と罰』(丸善株式会社、1913 年刊)を読み、1917 年に中村白葉訳『罪と罰』(新潮社、1917 年)、片山伸訳『死人の家』(博文館、1914 年)を眼にしている。1917 年の二冊は、当時、魯迅と同居していた周作人の日記に記されたものである⁵⁾。周作人はこの他に、1917 年 9 月 3 日、日本の丸善から取り寄せた「ホガルト訳『ドストエフスキ小説集』」を読んでいる。これは当時日本で広く読まれていた『Everyman's Library』シリーズ (J. M. Dent & Sons LTD) の C. J. Hogarth 英訳版『Letters from the underworld, The Gentle maiden, The Landlady』(1913)である。翌 9 月 7 日、周作人は『North American review』717 号を入手し、その中の英国人トライツのドストエフスキーに関する記事を読んでメモを取っている。

周作人はドストエフスキーに強い感銘を受けたと見え、トライツの記事を翻訳し、『新青年』4 巻 1 号 (1918 年 1 月)に「陀思妥夫斯奇之小説」を掲載した。これが中国で紹介された初の本格的なドストエフスキー論である。トライツの評論は、簡単に言えば、〈卑小な人びと〉に潜む〈人類共通の感情〉を描いた人類主義的・人道主義的作家としてドストエフスキーを論じた

(4)

ものであった。周作人は基本的にはトライツの論に沿う形でコメントを述べているが、その中でドストエフスキーの代表作『罪と罰』の中国語訳が現れていないことを嘆き、自ら翻訳の意図があると述べている（但し結局翻訳されなかった）。その後、新文化運動期において彼はたびたびドストエフスキーを「人道主義作家」として紹介した。一方、当時周作人と同居し、新文学の志を共有していた魯迅はドストエフスキーについて何も述べず沈黙している。

ドストエフスキー生誕百周年である 1921 年には、『文学旬刊』が記念特集を組んでおり、茅盾と鄭振鐸が文章を寄せている。茅盾は 1919 年よりロシア文学に注目し始め、商務院書館の編纂室にいた当時、同書館が所蔵する『Modern Library』シリーズおよび『Everyman's Library』シリーズを読んだほか、丸善書店洋書部などから洋書を取り寄せて読んだと述べており、ドストエフスキーもこのときに読んだと思われる⁶⁾。まず茅盾は「陀斯妥以夫斯基帶了些什麼東西給俄国？」（『文学旬刊』19号、1921年11月2日）で、ロシアにおけるドストエフスキー文学の効用を問い、「ドストエフスキーは確かに特別な贈り物をロシアの民衆、ロシアの知識階級に与えた」「それは人間性の永遠の真実である」「彼は、彼ら〔ロシアの知識階級〕にあの「虐げられた人々」自身の純潔な内面生活を開示して見せ、人間性の永遠なる真の偉大なる力を知らせた」と述べた。その後、「陀斯妥以夫斯基的思想」で総合的なドストエフスキー観を述べているが、そこには、メレジュコフスキーのドストエフスキー論『人及芸術家としてのトルストイ並にドストイエフスキー』（Merejkowski, “Tolstoi as man and artist”, G.P. Putnam's Sons, 1902）や、ラヴリン『ドストエフスキーとその作品』（Janko Lavrin 『Dostoevsky and his creation : a psycho-critical study』 W. Collins, 1920）、マリ『ドストイエフスキー作品と生涯』（J.M.Marry “Fyodor Dostoevsky : a critical study” Martin Secker, 1916）など、19世紀末から20世紀前半におけるロシア・ヨーロッパのドストエフスキー論の影響が見られる。これらの文献は、人間を靈的存在として描いたドストエフスキー独自の思想・哲学に注

目したロシア・シンボリストのドストエフスキー論（1900 年前後）の影響を受けたものが多く、当時ロシアに現れていたマルクス主義文芸理論によるドストエフスキー解釈と対立するものであった。矛盾はこれらのドストエフスキー論を参考にしながら、多角的に検討し、「人類の偉大な思想家」ドストエフスキーを論じた（『陀斯妥以夫斯基的思想』『陀斯妥以夫斯基在俄国文学史上的地位』『小説月報』第 13 卷第 1 期、1922 年 1 月）。

一方、鄭振鐸は人道主義作家としてのドストエフスキー像を強調している。鄭振鐸はまず「彼〔注：ドストエフスキー〕は我々を愛させ、我々を泣かせる伝道者である」と定義し、ドストエフスキーの略歴を述べた後、ロシア作家の特徴を述べたセルツァー（Thomas Seltzer）の言葉を引用している⁷⁾。セルツァーとは、『Modern Library』シリーズのロシア近代文学の編集・解説を多く手がけたアメリカのロシア近代文学編訳者であるが、鄭振鐸が引用したのは『Best Russian Short Stories』に収録されている解説の一部であった⁸⁾。セルツァーは貧しい人々をリアルに描くロシア文学は、デモクラシーやヒューマニズムを反映したものだとして述べているが、鄭振鐸は「これらの言葉をもってドストエフスキーの著作を評するならば実のところより適切である。ロシア作家の中で最も平民精神、博愛思想、人道主義に富むのはドストエフスキーである。人類を愛する彼の心は実際広大極まりない」とコメントし、ドストエフスキーを〈人道主義の作家〉と明確に定義した。

ところで鄭振鐸は 1919 年、北京の基督教青年会の会館が所蔵するロシア近代文学を貪るように読んだと述べている。『Best Russian Short Stories』にはドストエフスキー作品「クリスマス・ツリーと婚礼（The Christmas Tree and the Wedding）」が収録されており、鄭振鐸は矛盾同様、『Modern Library』シリーズ等でドストエフスキーを読んだと思われる⁹⁾。

以上、彼らのドストエフスキー観は、それぞれの文学観によって異なるものの、「人道主義的作家」という一点で共通するものであり、五四期にはこのような人道主義的なドストエフスキー像が形成され普及していった¹⁰⁾。例えば 1920 年に中国語訳されたドストエフスキー作品「冷眼〔クリスマス・

(6)

ツリーと婚礼)] (『東方雑誌』第17巻第11号、1920年6月)の「記者誌」には、「彼の文学は人道主義的色彩が最も鮮明である」と書かれている。また『文学旬刊』第32期～35期(1922年3月21日～4月21日)に掲載されたCP「朶思退益夫斯基与其作品」はドストエフスキーとトルストイをロシア文学の二大作家として比較して検討する中で、両者を「人道主義の提唱者」として定義した後、ドストエフスキー作品に表れた「人道」を強調している。この「人道主義的」イメージは五四期の思想と新文学の課題を背景に形成されたものであっただけに強く、その後のドストエフスキー解釈の枠となったと思われる。

だが、このようなイメージが形成される一方、ドストエフスキー作品の中国語翻訳はほとんど存在しなかった。周作人や茅盾、鄭振鐸らは『Modern Library』シリーズや『Everyman's Library』シリーズおよび日本語訳のドストエフスキー作品を既に読んでいたが、それらは一部の知識人に限られ、当時のドストエフスキーの中国語翻訳作品は、「賊〔正直な泥棒〕」(喬辛煥訳、『民国日報・覚悟』1920年5月)や「冷眼〔クリスマス・ツリーと婚礼〕」他、数編だけであった。このようなイメージ先行の現象を懸念し、翻訳書の刊行を強く望んでいたのが、当時沈黙を守っていた魯迅であった。

2、魯迅と未名社

魯迅は1924年、北京師範大学附属中学校校友会の講演において文壇の状況を批判し、民衆という土壌を育てる必要があると述べ、次いで外国思想を排斥する風潮を批判した後、「大勢の人がトルストイやツルゲーネフやドストエフスキーの名は聞き飽きている」が、その作品が殆ど翻訳されていないこと、外国作品の技術や思想の摂取が不可欠であることを主張した(「天才の出る前」¹¹⁾)。中国におけるドストエフスキーの初の翻訳書は、この講演に感銘を受け¹²⁾、魯迅を慕う北京の青年文学団体・未名社の一作家から刊行された。韋叢蕪訳『窮人〔貧しき人びと〕』(1926年)である。

魯迅は刊行に際して「序」を寄せ、「欠けていたところがちゃんと補われ

た」と祝し、ドストエフスキーは人間の魂の偉大なる検察官であり、高度な意味での写実主義者であり、貧しい病人たちを描いたことなどを指摘した。一方、ドストエフスキーとその作品については「短時間で研究し尽くせるものではなく、全面的に論じることなど私の能力の及ぶところでは絶対にない」として特定の解釈を慎重に避けている¹³⁾。

ここに、ある枠組みから作家を解釈するのではなく作品そのものを読者に届ける魯迅の慎重さが見られよう。このような慎重さは訳者の韋叢蕪(1905～78)を含む未名社のメンバーにも共通するものであった。未名社は1925年、北京にいた安徽省出身の青年、韋素園、その弟の韋叢蕪、台静農、李霽野、曹靖華らが結成した文学団体である¹⁴⁾。メンバーには、共産党に入党し、滞ソ経験を持つ韋素園、曹靖華が居たため、彼らは主にロシア・ソビエト文学の紹介・翻訳を中心とする文学活動を行った。韋素園(1902～32)、曹靖華(1897～1987)は、1920年社会主義青年団に入り、そこからモスクワに派遣され、東方大学で学んだ経験があった。

彼らは皆、ロシア革命と五四運動に影響を受けた文学青年であったが、あるイデオロギーを主張することなく地道な翻訳作業を続けた。韋叢蕪はまず「阿列伊〔『死の家の記録』『初めの印象』の一部〕」を翻訳し(『奔原』第2期所載、1925年5月)、次に『窮人』を刊行した。『窮人』はコンスタン・ガーネットの英訳『Poor People』を底本として韋叢蕪が訳し¹⁵⁾、魯迅が原久一郎の翻訳と比べて添削し、韋叢蕪の兄の韋素園がロシア語原文と合わせて校正したものである。翻訳書には、魯迅の「序」に加え、底本のセルツァー(前出)の解説の中文訳が付されている。セルツァーは、貧しい人々をリアルに描いたロシア近代文学に、ヒューマニズムとデモクラシーを見いだしており、『Poor People』の解説も、基本的にこのような観点から作品を紹介し、併せて、作家の生涯と思想を簡単に述べたものである。韋叢蕪はこの解説に対してコメントを付していない。このことは、彼が独自の主張を以てドストエフスキーを訳したのではなく、セルツァーのドストエフスキー観を伝える形で訳したことを意味している。

(8)

韋叢蕪は更に1931年、『罪と罰』をガーネットの英訳本から重訳して出版した(開明書店)、『罪と罰』が刊行される時、その広告には本間久雄の文章が引用されているが、それは「下層社会の真の状況及びそこに住む人々の生き生きした写実的な描写と、それらの状況及びそれらの下層社会の人々に対する作者その人のヒューマニステックな心持ち¹⁶⁾」という人道主義を強調する文章であった。つまり、韋叢蕪訳のドストエフスキー作品は人道主義的イメージと共に読者に届けられたのであったのであった¹⁷⁾。韋叢蕪の翻訳は五四期のドストエフスキー・イメージの枠の中で行われたものであり、彼は翻訳によって新文学の創出に貢献しようとしたのだと言えよう。

しかし韋叢蕪の翻訳をロシア語原文と合わせて校正した兄の韋素園は五四期のドストエフスキー・イメージと全く異なる新しいドストエフスキー像を読者に提供している。彼は『罪と罰』の「写在書后〔後書〕」で新しいドストエフスキー論を述べている。彼が引用したのはロガチェフスキーの『最新ロシア文学』(1923年)である。ロガチェフスキーとは初期マルクス主義文芸批評家であり、『最新ロシア文学』は階級的視点によって叙述された文学史である。この中でロガチェフスキーは、ドストエフスキーの作品はテーマから文体に至るまでその全てが都会生活の反映であり、ドストエフスキーは都市ブルジョワの新興文学の開拓者、「都会の芸術家」、「小ブルジョアの芸術の天才」であると定義している¹⁸⁾。韋素園はまた、ルナチャルスキーによる、革命の「新時代の預言者」という新しいドストエフスキー像を紹介し¹⁹⁾、ドストエフスキー作品には「時代生活革新の動力」である「反抗的精神」を養成する効果があると強調した。

ところで韋素園が引用したロガチェフスキー及びルナチャルスキーのドストエフスキー像は、ソビエト1920年代の良質なマルクス主義批評による見解であった。これ以降ソ連では、ドストエフスキーはマルクス主義文芸批評により全面的に否定されていくのであるが、ルナチャルスキーのこの見解はその直前の、1921年のドストエフスキー生誕百周年に際して提出された代表的な見解であった。

ソ連ではドストエフスキーが否定されつつあった頃、同時期の中国では、ルナチャルスキーらマルクス主義文学者によるドストエフスキー論は、五四期の人道主義的イメージを脱し、新たなドストエフスキー・イメージを与えるものとして紹介された。ここに、1930年代中国において、ドストエフスキー論が否定されることなく、翻訳書が多数出版され、様々なドストエフスキー論が流入する背景を見ることができる。つまり、韋素園のドストエフスキー論は、1920年代の人道主義的イメージを脱し、新たなドストエフスキー論を受け入れる時代へと橋渡しをする役目を果たしたのだと言えよう。

だが、この文章を執筆した1931年6月、韋素園は肺結核で死に際にあった。彼の病室の壁には「沈鬱な眼差して素園と彼の寝台を凝視」するドストエフスキーの大きな画像が掛けてあったという²⁰⁾。革命直後のロシアに滞在した経験を持ちながら、病室で独り死を見つめた彼は、人道主義作家とは異なるドストエフスキー像を見つめていたと思われる。1932年、韋素園は死ぬが、弟の韋叢蕪はその後も『死人之家〔死の家の記録〕』（正中書局、1947）、『卡拉瑪卓夫兄弟〔カマーズフの兄弟〕』（文光書房、1953）と翻訳を続け、未名社同人の李霽野も『被侮辱与被損害的〔虐げられた人びと〕』（商務印書館、1931）の翻訳書を出し、ドストエフスキー文学の伝播に大きな貢献を果たしたのであった。

3、瞿秋白のドストエフスキー観

ここで、1920年代における左翼文学者のもう一つの例として、瞿秋白のドストエフスキー観を検討したい。韋素園が1920年代末、ソビエトの良質なマルクス主義批評を紹介し、1930年代中国における肯定的なドストエフスキー受容の下地を作ったとするならば、瞿秋白はソ連マルクス主義文芸による最新の否定的なドストエフスキー像を中国にもたらしたと言える。瞿秋白のドストエフスキー論は韋素園と対になる形で中国におけるドストエフスキー受容に影響を及ぼしたと思われる。以下、検討したい。

瞿秋白は1917年、俄文専修館に入学し、五四運動では学校の学生リー

ダーを務め、社会活動に関わり始めた。彼ははじめトルストイ流の労働主義や愛に支えられた社会の理想像を持っていたが、やがて理想社会の実現方法として「革命」やマルクス主義に関心を示すようになった。一方、1919年末～1920年における思想的分化の中、瞿秋白は中国の社会改造の課題から出発し、ロシア文学を通じてその解決方法を学び、実践する方向へと向かった。彼は、『俄羅斯名家短編小説集』（新中国雜誌社、1920年）で、ロシアの現状は中国と類似した所が多いのでロシア文学の紹介が必要だと述べている。このような文学観に基づき、瞿秋白はロシア滞在中（1921～22）、ロシア文学を通じて社会の変動と思想の変化を学ぶことに努めた。こうして書かれた『俄国文学史』は、文学者の思想と作品を中心に、1905年革命に到る19世紀ロシアの社会と文化の変動を書いたものである。

内容を簡単に述べれば以下である。プーシキンに始まる19世紀の貴族知識人は凡庸な大衆から突出していたが、1861年の農奴解放前後、理想を述べて空談を繰り返す「余計者」知識人がツルゲーネフによって描かれた。続けて70年代、貴族階級の崩壊過程には、平民への負債を自負した旧貴族が登場する一方（ナロードニキ）、経済変動によって新たな資産階級「市儈〔小市民〕」が登場した。その消滅しつつあった貴族階級文化と資産階級文化が衝突し、更に無産階級文化が興りつつあった時、「古代ロシアの桃源郷に逃げ込んだ」「小資産階級〔プチブル〕」作家がトルストイとドストエフスキーであったと瞿は述べる²¹⁾。

瞿秋白は、両者の偉大さは「当時のロシア社会の“沈鬱な精神”を反映した」ものであるが、それは階級闘争の中現れた小市民階級の精神であるとして次のように述べている。「高潔な貴族の社会的地位が日に日に崩壊して普通の労働者になればあの生臭い市儈〔小市民〕気質に耐えられるわけがない。農村制度が日に日に都市の悪影響を受ければ精神的な繋がりを求めなくてはならない—しかし、一面のばらばらの砂である小農民や小労働者には悪を除く偉大な力がある訳がなく、ただ自分の“善”を少し知って慰めとし、抗議とすることができるだけだ」。つまり瞿秋白は、トルストイとドス

トエフスキーを貴族階級、新興資産階級、無産階級の階級闘争の歴史の中に置き、三者が争う中で現れたプチブルの逃避的精神を反映した文学であるとし、両者を階級的観点からまとめたのであった。

瞿秋白は、その後 8～90 年代新興資産階級がのさばる時代、「市儈主義」に反抗する闘士としてゴーリキーが現れたと続ける。ゴーリキーは 1905 年革命の先触れとなるプロレタリアを描き、彼らのために「反市儈主義〔反小市民主義〕」を唱える社会的使命を担ったと結んでいる。当時、瞿秋白は中国の現状を、没落した士大夫階級に代わり、西欧資本によって台頭した新興資産階級つまり中国の「市儈〔小市民〕」が支配する社会と考えており、ロシア史を通じて中国における「革命」の到来を予感していた。更に「革命」における知識人の役割をゴーリキーに見出すことにより、自分も革命家となる決意をするに至った²²⁾。だが瞿秋白がゴーリキーを見出す過程は五四期の理想だったトルストイを過去の知識人として理論的に否定し、同時にドストエフスキーも関心の対象から外す結果になったと言えよう。

ところで瞿秋白のドストエフスキー論はペレヴェルゼフの論と酷似している。ペレヴェルゼフは『ドストエフスキーの芸術』（1922 年）において、ドストエフスキーは農奴制の瓦解と資本主義台頭という時代に現れた都市小市民の精神を描いた天才的文学者と述べており、階級闘争の中に現れた「小市民文学」とする瞿秋白のドストエフスキー観と重なっている。ペレヴェルゼフの書籍は瞿秋白のロシア滞在中にモスクワで出版されており、瞿秋白が目を通した可能性は高い。重要なのは、ペレヴェルゼフの論に似た瞿秋白の『俄国文学史』が 1927 年中国で刊行され²³⁾、文学を志す青年に大きな影響を与えたことである。ロシア革命に憧れを持つ青年が目指すべきは、トルストイでもドストエフスキーでもなく、ゴーリキーであることを青年達は読み取ったであろう。

だが、瞿秋白が階級的視点とは異なった視点でドストエフスキーを読み、人間の心理を描いた作家として読んでいたエピソードが残っている。国民党による共産党テロが行われた翌年の 1928 年、瞿秋白が陳独秀に代わり、実

質的に共産党を指導していた時のことである。ある青年が、ロシア人から渡された党費用五千元を路上で奪われたため、瞿秋白に合わせる顔がないと言って行方不明になった事件があった（後になって、実はその青年が金を着服し、逃げたことがわかった）。その時、瞿秋白は「この金があつた青年の一生を台無しにしてしまった。ドストエフスキーの小説のように、あの犯罪者は一生良心をさいなまれるんだな」と言ったという²⁴⁾。このエピソードは、文学的才能を豊かに持ちながらも、社会運動に従事する革命家として生きた瞿秋白にとって、ドストエフスキーはプチブル作家として否定されるだけの作家ではなかった事を示している。だが、民国期とは瞿秋白がドストエフスキーを思想的課題とする時代ではなく、瞿秋白の否定的なドストエフスキー論は、このような当時の中国の政治・思想を見据えたものであったと言えよう。それは次節で述べる魯迅のドストエフスキーに対する態度と共通するものがある。瞿秋白は1930年代、魯迅と深い親交を結び、魯迅は瞿秋白を無二の親友と認めるのであるが、ドストエフスキーに対する両者の態度は、時代を見据えた知識人が共有するものを示唆しているように思われる。

4、1930年代におけるドストエフスキー

——日本の「文芸復興」の影響

以上、1920年代末には、五四期の「人道主義」的イメージを脱し、肯定・否定に関わらず多様なドストエフスキー論が流入する準備ができつつあった。そこに30年代に入りドストエフスキー作品翻訳が相次いで現れた。1930年代初頭には、韋叢蕪訳『罪与罰〔罪と罰〕』や李霽野訳『被侮辱的与损害的〔虐げられた人々〕』の外、洪靈菲訳『地下室手記〔地下室の手記〕』（商務印書館、1931年）、『賭徒〔賭博者〕』（湖風書局、1933年）などが次々に刊行されていった。ここにおいて中国は多様なドストエフスキー文学の伝播状況が展開される段階に入ったのであった。

一方、多様なドストエフスキー論も紹介され始めた。例えば外国の研究成
果では精神分析的学説に依拠したヤルモリンスキーの最新作「Dostoevsky

: A Life] (『文学』第4巻第1号掲載、1934年) や、雲林訳・ルナチャルスキー「ドストエフスキー論」(『春光』第1巻第2期掲載、1934年)、斐琴訳・ジッド「ドストエフスキー生誕百年を祝い、ビュー・コロンビエ座において朗読した小演説」(『東流』第1巻第3・4期、1934年)、沈起予訳・アンドレーヴィチ「ドストエフスキーの特質」(『訳文』第2巻第2号掲載、1935年) 等が紹介された²⁵⁾。紹介された記事は、ルナチャルスキーからジッドに至る、1920～30年代に圧倒的な影響力を持ったドストエフスキー論であった。

同時代のドストエフスキー論の流入にあたって注目すべきは、1934～35年、日本文壇におけるドストエフスキー流行の影響を受ける形で様々なドストエフスキー論が中国に流入したことである。例えば『文学』3巻1号(1934年7月)の欄外には、日本で昇曙夢『綜合研究ドストエフスキー再観』(ナウカ社、1934年)が刊行されたことが紹介されている。昇曙夢のこの書物は副題に「マルクス主義の照明のもとに」とあるように、1910～20年代におけるロシアのドストエフスキー研究の成果を総合的にまとめたもので、ロガチェフスキー、ルナチャルスキーほかマルクス主義文芸批評から、ドストエフスキーの反動性を批判する傾向を受け継いだペレヴェルゼフの論まで収録されている。

また東京左聯の機関紙『東流』創刊号(1934年8月)には、曼之訳・除村吉太郎「ゴゴリからトルストイへ」(原載『浪漫古典』第1輯、1934年)、莫孚訳・岡澤秀虎「ドストイェフスキーの方法」(原載『文芸』第2巻第4号、1934年)が、第1巻3・4号(1935年2月)には魏晋訳・米川正夫「露西亜文学に於けるドストイェフスキーの位置」(原載『書物』特輯ドストイェフスキー研究、1934年)の翻訳が掲載されている。

これら東京左聯の機関誌『東流』に掲載された『浪漫古典』や『書物』のドストエフスキー特集は、日本の「文芸復興」と呼ばれる文学の再興を受けて刊行されたものであり、マルクス主義文芸批評によるドストエフスキー否定的評価から、作品研究、伝記研究など各種の立場を超え、千差万別のドス

トエフスキー論が掲載されたものであった。

当時、日本では左翼運動の弾圧によるプロレタリア文学運動の衰退に伴い「文芸復興」の風潮が起っていた。「文芸復興」とは、文壇を支配していたプロレタリア文学が終息した後、その支配から解放された芸術至上主義や既成文壇作家が自由な「文芸」を求めて起こった文芸運動であり、またプロレタリア文学の挫折、左翼運動の挫折による知識人たちの不安の精神を反映するものでもあった。「転向」によってアイデンティティの危機に陥った左翼作家たちは不安な精神状態に陥ると同時に、解体された「私」を再構築する文体を模索していた。明治時代以来、日本ではドストエフスキーは「私」という自意識を描く文体として私小説との関連で読まれてきた歴史があったが、プロレタリア文学の終息による「私」の挫折は作家たちを再びドストエフスキーへと駆り立てたのである。ここにおいて日本では自意識をめぐる対話を書いたドストエフスキー作品が再び読まれ始め、その思想が研究されたのであった²⁶⁾。

このとき、小林秀雄による、シュエストフのドストエフスキー論を介した「不安の伝道師」としてのドストエフスキー像が流行する一方、それに反対する意見を含む様々なドストエフスキー論が現れた。それらを一堂にまとめた「文芸復興」を最も象徴する雑誌が『書物』『浪漫古典』であった。こうしたドストエフスキー隆盛の機運を受け、1934年、日本・三笠書房からドストエフスキー全集が刊行された。このような30年代半ばに隆盛した様々な日本のドストエフスキー論が、同時代の中国に流入したのであった。

以上のように、中国の1930年代前半はドストエフスキーの翻訳書が充実し始めると同時に、マルクス主義批評による否定的なドストエフスキー論を含め、日本やヨーロッパのロシア文学者のドストエフスキー作品論や作家論など、多種多様なドストエフスキー論が一度に流入した時代であった。ここにおいて中国の読者の前にドストエフスキーに対する多様な解釈が可能となる基盤が形成されつつあったと言えよう。

但し、このような多様なドストエフスキー論の流入の背後に、中国の当時

の思想的・文学的な課題を見出すのは難しいところが、中国のドストエフスキー活況の特徴であると思われる。同時代の日本のドストエフスキー盛況には、プロレタリア文学終息によるドストエフスキー再読という背景があり、西欧においては、「純粹小説」を追求したジツドによる新たな文体の模索など前衛的な表現を求める要求があった。またソ連ではマルクス主義文芸批評によるドストエフスキー否定が 1930 年代において全盛を極めるなど、それぞれの思想・文学状況における課題としてドストエフスキーが浮上していたのである。だが中国では、それら同時代のドストエフスキー論を取り込む背後に中国独自の文学的・思想的課題があったというよりも、それ以前の段階であった。例えば 1931 年、趙影深は「杜思退益夫斯基与新俄」という記事でソ連のドストエフスキー批判について報告しているが²⁷⁾、この記事が影響力を持つことはなく、ドストエフスキー否定に関する中国作家の記事も現れなかった。つまり 1930 年代中国におけるドストエフスキー紹介の活況は、翻訳書の刊行や同時代の世界のドストエフスキー熱によって様々なドストエフスキー論を旺盛に取り込んだことによって起こったのであり、中国の思想的・文学的課題によってドストエフスキーを取捨選択したものではなかったといえよう。

このような中国のドストエフスキー伝播の活況の中、独り〈中国にとってのドストエフスキー〉を論じたのが魯迅のエッセイ「ドストエフスキーの」である。このエッセイは、1934 年、魯迅が日本・三笠書房版『ドストエフスキー全集』を購入しようと注文したところ、三笠書房から逆に広告を書いて欲しいと依頼され、その要請に応じて書いた文章である。魯迅のエッセイは日本の雑誌『文藝』1936 年 2 月号に掲載され、中国では同時期に『青年界』第 9 卷第 2 期および『海燕』第 2 期に、その後『東流』第 2 卷第 3 期にも「陀思妥夫斯基〔ドストエフスキー〕」の題で掲載された。

エッセイは魯迅自身のドストエフスキーに対する感想で始まっている。「彼（注：ドストエフスキー）は餘りに偉大で、しかも自分は其の作品をさ

う勉強して読んだことがなかつた。…回憶して見ると若かつたときに偉大な文学者の作品を読んで其の作者を敬服すれども、どうしても愛しないものは二人有つた。一人はダンテで…もう一人即ちドストエフスキーだった」。続けてドストエフスキーは偉大であると述べながら、「読んで行く事をよさうかと思つた」として、次のように述べている。

只支那の読者としての自分は未だドストエフスキー的忍従、即ち横逆に対する徹底的な、本当の忍従を腑に落ちない。支那には露西亜のキリストが居ない。支那には神の代りに聖人の礼義が君臨して居る、殊に弱々しい女性の上に²⁹⁾。

そして、ドストエフスキーを借りて中国の「忍従」が「虚偽」であることを指摘しつつも、ドストエフスキーの「忍従」も単なる「抗議」ではなく「偉大な忍従」としてダンテ的な「天国」への道を開くものであり、「中庸な人間」にとっては天国に登る道も地獄に墮ちる道も閉ざされているという内容を述べている。

この簡単なエッセイにおいて、魯迅は個人的なドストエフスキー論を述べているように見えるが、その実、中国におけるドストエフスキー文学が持つ危険性を示唆しているようにも思われる。魯迅はダンテとドストエフスキーを並べ、両者の文学そのものについての評価を下さず、ドストエフスキーを鏡として中国的「忍従」が虚偽であることを述べ、中国における現実を読者に伝えた上で、ドストエフスキーもまたその救いとはならないことを示している。1930～34年、中国独自の思想的課題とリンクしないまま様々なドストエフスキー論が流入する中、一人中国にとってのドストエフスキー文学の意味を述べた魯迅の発言は、突出した重みを持つものであったと言えよう。日本での発表（1936年2月）と同時期の中国で三誌に掲載されたことにより、魯迅の文章は、中国のドストエフスキー文学の受容に本質的な問いを投げかけるものとなった。

だが、魯迅のこの文章が発表された後、ドストエフスキーの紹介・翻訳は殆ど現れなくなった。魯迅の言葉を経て〈中国におけるドストエフスキー〉が本格的に考えられ始める前のことであった。その直接的な原因は、翌年の日中戦争勃発や抗戦文学の隆盛によってドストエフスキーへの関心が一層薄れたことや、日本でドストエフスキー流行の衰退（1937年）等が考えられる。こうして30年代のドストエフスキー伝播の小さな活況が、中国の読者によるドストエフスキー解釈へと展開するのは、中国近代文学が豊饒な可能性を持った40年代を待たねばならなかった。

終わりに

以上、1920～30年代の中国におけるドストエフスキー伝播状況を整理し、その中に魯迅の存在を位置付けてきた。簡単にのべれば、20年代から30年代の中国では、(1) ドストエフスキー作品の翻訳書が多く刊行され、(2) ソ連1920年代のマルクス主義文芸批評及び、同時代日本の文芸復興に伴う様々なドストエフスキー論が流入した。この二点により、中国の読者の前に、(1) 五四期の人道主義的イメージから脱し、(2) ドストエフスキーを様々な角度から解釈する状況が整い始めたと言えよう。但し、このような状況においても「五四時期から30～40年のドストエフスキー評価は、生涯、思想と芸術的特徴の一般的な紹介から具体的な作品の批評に入ったが、その大体は生涯の簡単な紹介と内容・梗概の総論に流れ、ドストエフスキーの強大にして複雑かつ独特の芸術世界に対し、中国の評論界は疎遠であり、論じる力に欠けていた」と指摘されるように³⁰⁾、ドストエフスキーが中国において思想的課題として受け止められた形跡はない。ドストエフスキー文学は、韋素園や瞿秋白に見られるように作家個人の精神的な糧にはなったであろうが、中国近代文学の課題とリンクする時期ではなかったと思われる。

このような状況において、ドストエフスキーに対する魯迅の態度・言及は突出したものであった。魯迅は同時代のドストエフスキー受容状況から一步離れた場所に立ちながら、ドストエフスキーを見つめ続け、中国におけるド

ストエフスキー受容に対して大きな貢献を行った。1920年代、ドストエフスキー作品の中国訳がない時、翻訳書の刊行に尽力し、30年代、世界の同時代のドストエフスキー論が流入する状況の中、中国の読者として、中国におけるドストエフスキー作品の意味を述べたのである。これは、魯迅が中国におけるドストエフスキーに対する心理を「代表」するものではなく、むしろ魯迅がドストエフスキーに強く関心を抱きながらも、中国の文学状況を踏まえた上で採った彼自身の思想的態度であったのではないか。

とりわけ30年代前半は、左翼作家連盟が結成されたものの、国民党による言論統制と弾圧に加え、左聯内部の分裂などから活動は壊滅状態にあった。このような中、魯迅はソ連の短編小説集『豎琴』の前記で次のように述べている。

ロシアの文学はニコライ二世の時から「人生のため」だった…この思想は約二十年前に中国の一部の文芸紹介者と合流し、ドストエフスキー、ツルゲーネフ、チェーホフ、トルストイの名は次第に活字に現れ、かつ、次々に彼らの作品は翻訳された。当時、それを「被圧迫民族文学」として系統的に紹介したのは上海の文学研究会であって、彼らは被圧迫者のために呼びかけた作家であると見なすことができる。およそこれらはプロレタリア文学そのものからあまりに遠く、従って紹介された作品は…少しばかりの抵抗でしかない。(1932年9月9日筆³¹⁾)

かえりみれば中国の近代は戦争と革命の時代であり、そこで必要とされたのは第一に闘争と反抗であった。魯迅自身は伝統の中に立ちながら伝統の暗黒面と戦い、青年が新しい道を切り開くことを切望していたが、新しい道もまた「忍従」を許されない道であった。1930年代、中国ではドストエフスキーに耽溺することが許されない事を、魯迅は知っていたのではないだろうか。1910年代から30年代に渡ってドストエフスキーを見つめてきた魯迅は、それを知りつつ、ドストエフスキーに耽溺できない現状を見据え、「ドスト

エフスキーの「」を書いたと同時に、中国の課題とリンクしない伝播状況に対し、〈中国におけるドストエフスキー〉という視点を持つよう示唆したのではないだろうか。ゆえに、魯迅の言葉は、ドストエフスキーを読み始め解釈しつつあった 1930 年代の中国文壇を代表するものではなく、むしろ対局にある深みを持つものだったと言えよう。

本稿では 1920～30 年代におけるドストエフスキー文学の伝播を魯迅を軸として初歩的な整理を行った。魯迅のドストエフスキー言及の意味を知るには、魯迅の思想に奥深く踏み込む必要があり、またそこから 30 年代ドストエフスキーの受容の一面も見えてくると思われるが、それは今後の課題としたい。

注

- 1) 民国期においてドストエフスキーの伝播・紹介が遅れ、その影響も小さかったことを多くの論者が指摘している。李春林・杜秀華「陀思妥耶夫斯基作品在中国的伝播」『遼寧工程技術大学学报(社会科学版)』第 1 卷第 3 期、1999 年。陳建華「中国的陀思妥耶夫斯基研究」『中国蘇俄文学研究史論』所収、重慶出版社、2007 年。王聖思「陀思妥耶夫斯基与中国」『俄国文学与中国』華東師範大学出版社、1991 年。
- 2) 王聖思は、魯迅の言葉は中国人読者がドストエフスキーにもつ「心理距離」を分析したものと指摘する。「陀思妥以夫斯基与中国現代文学創作」『外国文学研究』1990 年第 2 期。
- 3) 「ドストエフスキイの」『文芸』1936 年 2 月号、『魯迅全集』第 8 卷、457～459 頁、学習研究社、1984 年に収録。中国語訳は「陀思妥夫斯基的事」『魯迅全集』6 卷、411～412 頁、人民文学出版社、1981 年(以下『魯迅全集』は同版を用い、記載を略す)。中国語訳には「殊に弱々しい女性の上に」の一節が欠けている。
- 4) 中島長文編刊、1986 年。
- 5) 『周作人日記』上巻、大象出版社、692～693、719～720 頁、1996 年。
- 6) 矛盾は次のように延べている。「編訳所の図書館には英文の本が多数あったが、全く雑然としていた。そこには有名な『萬人叢書』(Everyman's Library) のが所蔵されており(略)ほかにはアメリカで出版された『新時代叢書』(Modern

Library) のセットがあり、その性質は『萬人叢書』と同じだった。]「1919 年から私はロシア文学に注目し始め、その方面の書籍を集めた。(略)『萬人叢書』には帝政ロシア時代の文豪トルストイなどの英訳本があり、容易に入手できた」。また、当時アメリカ人が開いた「伊文思図書公司」や丸善洋書部から洋書を取り寄せたと述べている(『我走過的道路』(上) 130～131 頁、人民文学出版社、1981 年)。1919 年当時、『Everyman's Library』には『Crime & Punishment』(No.501,1911) 『Letters from Underworld』(No.654,1913)、『Poor Folk & the Gambler』(No.711,1915) の作品が、『Modern Library』には『Poor People』、『Best Russian Short Stories』(「The Christmas Tree and the Wedding」が収録) が収録されており、これらを通じて茅盾はドストエフスキー作品を読んだと思われる。(『Everyman's Encyclopedia』 Vol.5, edited by E.F. Bozman, M.A. Dent & Sons Ltd, 1958, London を参照のこと。Modern Library については目録等が探せず、原本にあたって出版年を確認したほか、原本に収録された目録等から調査した。)

- 7) 「陀思妥以夫斯基の百年記念」『文学旬刊』19 号、1921 年 11 月。
- 8) 鄭振鐸が引用したセルツァーの文章は『Best Russian Short Stories』(compiled and edited by Thomas Seltzer, Boni and Liveright Ltd, 1917) の「Introduction」vii 頁。
- 9) 芦田肇は茅盾も『Best Russian Short Stories』に収録されたセルツァーの解説に大きな影響を受けたことを指摘している。「初期茅盾における原理的文学観獲得の契機—そのロシア文学受容—」『東洋文化研究所紀要』第 101 冊、1986 年。
- 10) 丁世鑫「“為人生的現實主義作家” —陀思妥以夫斯基在現代中国的的基本定位」『俄羅斯文芸』2007 年 3 期でも論じている。
- 11) 「未有天才之前」『魯迅全集』1、166～170 頁。
- 12) 李霽野「從未名社談到《未名小集》」(『魯迅研究文叢』1 期、1980 年 3 月) を参照のこと。
- 13) 「小引」『窮人』開明書店、1926 年 6 月。
- 14) 未名社についての先行研究に、下村作次郎「「奔原」という小雑誌をめぐる」(『啞啞』十期、1978 年) がある。
- 15) “Poor People”, introduction by Thomas Seltzer, Boni & Live right Inc, 1918 以前。
- 16) 本間久雄『欧州近代文芸思潮概論』(早稲田大学出版部、1927 年)、346 頁。
- 17) 韋叢蕪訳『罪与罰』(開明書店、1931 年) 裏頁の広告。
- 18) 井田孝平訳、リウオフ・ロガチェフスキー著『最新ロシア文学研究』(聚芳閣、1926 年) を参考にした。ロガチェフスキーのドストエフスキーについては黒田辰男「ドストエフスキーに関するマルクシズムの二文献」(『書物』第 2 年第 6 冊、1934 年、113 頁) が詳しく論じている。

- 19) 韋叢蕪は参考文献にルナチャルスキー『革命のシルエット』を挙げているが『文学のシルエット』の誤りだと思われる。
- 20) 「憶韋素園君」『魯迅全集』6、64 頁。
- 21) 『瞿秋白文集』文学編 2 卷、人民文学出版社、1986 年、194 頁。
- 22) 瞿秋白のロシアにおける思想的転換については拙論「一九二〇年代における瞿秋白の「市儈」観について—ゴーリキーとの関係を中心に—」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 7 号、2004 年）を参照されたい。
- 23) 蔣光慈の著作と合わせ 1927 年『俄羅斯文学』として創造社出版部から出版された。
- 24) 鄭超麟『鄭超麟回憶録』第 6 章、北京現代史料編刊社、1986 年。日本語訳は長堀祐造、三好伸清、緒形康訳『初期中国共産党群像：トロツキスト鄭超麟回憶録』1 卷 285～286 頁（平凡社、2003 年）を参考にした。
- 25) 『春光』『東流』は東京左聯の機関紙であり、訳者は原典から翻訳したのではなく日本の翻訳書からの重訳だと思われる。
- 26) この時代の思想状況およびドストエフスキー流行については主に松本健一『ドストエフスキーと日本人』（朝日新聞社、1975 年）、木下豊房「ドストエフスキー文学と昭和一〇年前後」（『近代日本文学とドストエフスキー』成文社、1993 年）等を参考にした。
- 27) 趙影深「杜思退益夫斯基与新俄」『小説月報』第 22 卷 11 期、1931 年 11 月。
- 28) 前注 3、同。
- 29) 前注 3、同。
- 30) 李今「陀思妥以夫斯基在三四十年代的中国」『魯迅研究月刊』2004 年第 4 期。
- 31) 『『豎琴』前記』『魯迅全集』4、432～7 頁。